

フランスのショアーハ歴史学は なぜ今日も発展し続いているのか? — 冷戦終結後の史学史的研究 —

村上 良太[†]

Why is the historiography of the Shoah in France still developing today?
— Historiographical research after the end of the Cold War —

Ryota Murakami

1. はじめに

第二次世界大戦が終結して、2025年で80年を迎えた。戦争体験を引き継ぐことは重要だが、欧州のユダヤ人絶滅政策（ショア）に関する歴史学は経験者が世を去った後でも発展可能なのだろうか？そこでフランスに目を向けてみると、極めて活気に富んでいた。新たなテーマの研究が次々と生まれ、論壇では気鋭の歴史家たちが次々登壇している。強制収容所からの生還者が死に絶えても発展していく新しい歴史学の方法論も築かれつつあった。そこで経験者が減り始めた冷戦終結以後（1989-）に焦点を当て、フランスのショアーハ歴史家たちがこの時期にいかに研究を発展させていったかを検証してみた。

本論考では上記のテーマを以下の三点から論じる。

- 歴史家たちは証言も記録も残さずに死んでいった人々の歴史を探る方法を構想し、新しい歴史記述に挑戦し始めたがそれはどういうものか。
- ショアーに関わったフランスの官僚たちの個人情報が公開されたことでショアーハ歴史学がいかに活性化されたか。
- 欧州連合の統合の過程で歴史家のアイデンティティとして「欧州人」が立ち上がったことでショアーハ歴史学にいかなる変化が生まれたか。

2. 事実の記述の欠落をいかに埋めるか？

2.1 歴史叙述に「Je=私」を挿入する

冷戦終結後に始まった歴史叙述の試みの1つとして、イヴァン・ジャブロンカ著『私にはいなかった祖父母の歴史』（2012）を取り上げる。ユダヤ系フランス人の歴史家ジャブロンカ（1973-）が生まれた時、父方の祖父母が

アウシュビッツで殺されてから四半世紀以上が過ぎていた。経験者が死亡しており、その人の日誌や証言などの記録がほとんど存在しない場合、いったい歴史家に何ができるのだろうか。その人の生の軌跡は永遠の消失ということになるのだろうか。ジャブロンカは不在の祖父母の人生を調査と想像力で描いてみる試みを始めた。

「彼らの歴史について本を書こう、むしろ正確には、彼らについての歴史の本だ。依拠するのは、保存資料、インタビュー、文献、文脈化、社会学的論証であり、これらを通して私は＜彼らを知る＞ことになろう。その本は彼らの人生についての語りと私の調査の報告で構成され、目指すのは彼らの理解であって、再び生かすことではない」[1]

調査で判明した事実を叙述した「語り」に、調査のプロセスやその時のJe = 私の感情や想像を加えることでこの歴史書には祖父母が実際に生きた過去と作者が調査を進める現在の2つの時間が交錯する。現在の介入により、歴史家が案内人となることで読者を過去へ導き入れやすくなる。ジャブロンカは2019年6月の日仏会館での来日講演「社会科学における創作」[2]で、その方法論について語った。事件が起きた正確な時間や場所、その時の祖父母の思いなどがわからないとしても、問い合わせを喚起したり、調査したり、考えたり感じたりする私=Jeを書き込む。わからなさいことや欠落はそのまま生かして歴史叙述を進める。ジャブロンカはこれを「方法としてのJe」と呼んでいる。「方法としてのJe」の介入により、歴史学に限らず社会科学は無味乾燥さを克服して、イノベーションを行うチャンスが生まれると言うのだ。それは「科学」に文学を導入することでもある。その科学も様々な領域を架橋するものだ。

歴史家のジャブロンカは神の視点から歴史を書くのではなく、虫の視点（=Je）から、限られた史料や情報を総合し、そこから想像する自由を彼の実践する歴史学で活用す

[†]2024年度修了（人文学プログラム）

るのである。こうすることで彼は史料も乏しく、文章も特に残さず歴史の闇に消えてしまった祖父母の人生に対して記録の欠落を欠落として提示することで迫っていく。これは生存者が絶えた後にも有効な方法であろう。生きている家族や子孫の視点=「方法としてのJe」があるからだ。

そこで私なりにフィクションの文学作品をここで考えてみよう。セルバンテスが神の視点を排して人間の視点で『ドン・キホーテ』(1604-1605)を記したことからこの小説は近代文学の始祖と位置づけられた。神の視点ではないがゆえに世界は謎と多義性をはらんでおり、事実を見ている人次第で解釈も異なり、そこに味わいも生まれる。『ドン・キホーテ』の翻訳者である牛島信明によると『ドン・キホーテ』はシーデ・ハメーテ・ペネンヘーリなる歴史家がアラビア語で書いた騎士道の古文書を、モーロ人がスペイン語に訳し、それをセルバンテスが発見して「編集」したという仕掛けになっている。[3]そのため、あちこちに作者のセルバンテスにも埋められない情報の欠落がある。たとえばセルバンテスは「騎士の苗字についてはQuixadaか、あるいはQuesadaと言い伝えられており（これじゃ、まるであごの骨か、チーズケーキだ）、これについてはこれを論じた著者たちの間にいささか不一致が認められる」と冒頭で打ち明けている[4]。ジャブロンカは、ノンフィクションの世界においても謎と多義性を活かすことができると考える。それが知的な面白さにつながるからだ。

ジャブロンカは、祖父母が生まれたポーランドの村に足を延ばし、ユダヤ人が一人もいなくなった村を歩き、かつての街並みを想像した。公文書館では1930年代の反体制的労働組合運動に関する警察の報告書の束から祖父に関する裁判記録を見つける。祖父母は共産主義者で搾取のない世界を目指し、シオニズムを含めたすべてのナショナリズムに反対していた。祖父のマテスも祖母のイデサも共産主義の革命家だったため、ポーランドで蔓延していた反ユダヤ主義と政府の弾圧から逃れてフランスに渡ったのだった。

1940年生まれのジャブロンカの父は、両親が1943年にユダヤ人として検挙されたため、両親についてはごくわずかの記憶しかない。最も身近な肉親にして、この圧倒的な記憶の欠落こそが、皮肉にもジャブロンカの調査の飛躍台となつたのである。

次の描写は祖父母がユダヤ人であるがゆえに検挙され、パリ郊外のドランシー収容所に入れられて、ポーランドへの移送を待つひと時を孫のジャブロンカが資料と現地調査をもとにそこで問い合わせ想像する自分をも加えて書いた文体である。

「ドランシーでの生活は、ほかの強制収容所とほとんど変わりがない。6時にコーヒーのドラ、便所とシャワーの混雑、中庭で延々と続く点呼、パンとコーヒー、具のないスープの配給行列という具合である。マテスは遅れて到着したために、少なくとも初めのうち

は、イデサと同じ部屋に入っていない。イデサは第十五階段の五階。マテスは第九階段の四階である。ドランシーにいる数日の間に、彼らはおそらく知っている顔に会っていよう。クレブフとカレル・ソメルは彼らと同じ時に収容所にいる。しかし彼らがおしゃべりをしたり、トランプをしたり、洗濯をしたりしている様を私は思い描けない。自分の部屋から引き出され、階段を引っこ立てられ、子供から引き離されて、この先どこかに強制移送されるという時、いったい人は何を考えるのだろうか。生を見ているのか、それとも死なのか」[5]

もし「方法としてのJe」を使わなければ、未知の対象、記録のないことについては何も語れなくなってしまう。一方、「方法としてのJe」を介入させれば欠落にブリッジを施すことができ、さらには実際がどうだったかわからなければそう隠さず叙述すればよいのである。

では、歴史研究の執筆と一般にノンフィクション作家が行っている執筆との違いはどこにあるのだろうか？それは著者が歴史家であるがゆえに、歴史研究の方法を用い、いかに文中に「私」を挿入したり、想像力を羽ばたかせたりしたとしても事実の確認を怠らず、真偽を判別し、事実と想像を峻別し、事実と事実を結ぶ線を歴史家として着実に引いたということであろう。それは祖父母の最期について記した次の叙述にさりげなくも刻印されている。

「1946年、パリ。イデサもマテスも戻らなかったが、アネットはマテスの死亡について、たとえごくわずかだとしても正確な情報を得ている。言い換えれば、証人がいたのである。アウシュビッツの文脈では、個別の死（処刑、心臓へのフェノール注入、チフス、衰弱、自殺）か、ゾンダーコマンドの集団粛清（1944年11月ハイム・ヘルマンが亡くなる場合のように）が考えられる。いずれにしても、誰かが見て、誰かが聞いて、誰かが確かな内容をもたらすことができたのだ。『彼女については何もわかりませんが、何も期待できません』このまったく否定的な文からは、一つ確かなことが浮かび上がる。イデサはすぐに死んだ、ということである」[6]

ジャブロンカは収容所に到着した人々がどのような状態なのか、人間関係はどうなのかといった実態を調査でつかんでいるからこそ、このように結論づけることができた。たとえ、当時の状況に自由に想像力を羽ばたかせたとしても、起こり得る事実の可能性の範疇の中にとどめて、その枠も締めていく。この数行の中に歴史家（人文科学者）の調査と思考が凝縮されている。その合理的な推察のプロセスと目標への地道な歩みこそが歴史学の道行きであろう。読書論的には筋書きがハラハラドキドキで面白いのではなく、探求という行為自体が探偵小説や警察小説のように基本的にハラハラドキドキで知的魅力に富んでいるのである。また本書においてはあっさりと史的事実が判明する場合よりも、むしろ最後まで情報の欠落があることが幸いし

たと思われる。歴史家が調査によって得た情報の積み重ねから当時起きたいくつかの可能性を様々な想像して読者に提示することで、彼の叙述は1つの家族の物語を越えて時代全体の状況まで射程を広げることになったからである。これは1つの家族や地域の歴史を世界に「開いていく」行為なのだ。その意味でも過去を多くの人々と共有するためのプラットフォームを築いたのが本書の調査執筆とその方法論であろう。

2.2 記録を残さなかった人を対象とする歴史研究

ジャブロンカの先駆として、アラン・コルバンが1998年に出版した『ルイ=フランソワ・ピナゴの見出された世界～ある無名人の痕跡をめぐって、1798-1876』が挙げられなくてはならないだろう。コルバンはアナール学派に属し、『においの歴史～嗅覚と社会的想像力～』（1982）など、感性や心性の歴史について挑戦的な作品を多数記してきた。彼は王侯貴族や軍人や政治家を中心とした政治史と異なり、無名の庶民の生を取り上げ、そこからもう一つの歴史を編み上げた。では無名の人たちに歴史の光を当てるに意味があるのだろうか。コルバンは本書でノルマンディ地方の森に住む一人の木靴職人の人生を描くのだが、この本が挑戦的であるのは木靴職人のピナゴが日記とか発言記録と言ったようなものは何一つ残していない無名の人物だったことにある。序文でコルバンはまさにこういう人を主人公として探していたと告白しているのだ。

「私のねらいは史料を集め、次にピナゴの生の複数の痕跡を組み立てていく作業となるが、しかし、それらの痕跡はもともとピナゴの存在を組み立てるために存在したものではないし、そもそも誰かの存在を組み立てるための要素ですらない。要は最初から散逸していた要素（断片）で1つのジグソーパズルを組み立てるということなのだ。そして歴史の中に呑み込まれてしまった人々、痕跡が消し去られた人々、しかし、だからといって証言をさせると要求することもない人々について書き記すということである」[7]

コルバンは19世紀フランスの農村の文化史的な文脈を活用し、ピナゴの場合はどうだったかを様々な時期ごとに推測し、叙述した。コルバンのねらいは明白だが、しかし、無名なら誰でもよかったわけではなかっただろう。どの地方の誰を選んで書くかで印象は大きく変わるはずだ。ルイ=フランソワ・ピナゴが選ばれた1つの理由はピナゴの生まれた年と没した年が1798年と1876年であることではなかっただろうか。ピナゴの人生が1789年のフランス革命から1870年の第三共和政の確立にいたる激動の1世紀とほぼ重なることは、コルバンにとって魅力的な調査対象だったに違いない。パリの政治の表舞台では様々な英雄が跋扈し、王、皇帝、大統領まで華麗で毒々しい政争と喧嘩に満ち溢れ、ドイツとも戦火を交えた時代である。森に生き、読み書きのできない木靴職人にも時代の変化はひたひたと押し寄せてくる。徴兵、教育、税金、飢餓と物価高と

物乞いたち、さらにはドイツ軍の侵攻と占領である。木靴を生産する職人の人生は、ピナゴの息子たちが木靴職人を継いだように、たとえ貧しくとも確かな技術を持って地域に根差し、家族とともに生きた、いわば地に足の着いた人生だった。であればこそ、喜怒哀楽はあっても確かな人間関係があるので、当時の農村の文化史的背景をおさえればピナゴの人生はコルバンにとって比較的想像しやすかっただろう。驚くべきことにコルバンは最終章で「市民権の構築」について語るのだ。ここに来て、読者はコルバンの隠れたもう1つの意図に気づくだろう。ピナゴの生きた時代は革命時代から男子普通選挙制度が導入され、さらに共和政が確立するまでの進歩派と守旧派が繰り広げる闘争の世紀だった。国民主権という革命的な政治思想や普通選挙、さらには徴兵制を農村の彼や子供たちがどう受け入れたのか。これはまさにアナール学派が伝統にする心性の歴史研究を押し進める試みと言えよう。

「ルイ=フランソワは民主主義を構築する権利について人々がゆっくりと学んでいった時代を生きた。男子の普通選挙である。したがってたとえ森の脇に住まいを構えていた男だったとしても、政治の議論から排除されないわけではないのだ」[8]

フランスにおける心性史や文化史、社会史の発展が歴史学の革新を下支えしているのだ。移民史のように、国家の枠からはみ出た人々や非正規雇用の労働者、複数のアイデンティティの保有者など、単純に1つのアイデンティティに帰属させられない人々の歴史に関して、彼らの新しい歴史学のアプローチ（「私」の援用や心性史や文化史のアプローチなど）が新たな扉を開く可能性がある。

3. 歴史学発展の触媒としての個人情報公開

3.1 冷戦終結後に公開された戦時中の官僚たちの個人情報

本章では二人の歴史家に焦点を当てる。まず一人は2003年に『政令による略奪～フランスの金融機関のアーリア化と復元 1940-1953～』を記したジャン=マルク・ドレフュスである。「アーリア化」とは、経済の領域におけるユダヤ人排除のプロセスであり、ユダヤ人の企業や金融機関からユダヤ人を追放して非ユダヤ人に買い取らせたり、接収したり、消滅させたりした一連のナチスの政策を指す。ドレフュスは導入で「アーリア化が独立したテーマとして浮上してきたのはようやく最近の1990年代半ばのことだった。以前は「破壊」（※ショアーリーを指す）の発端の一つとしてしかとらえられていなかった。すなわち、ナチスがユダヤ人の殺人と移送を行う前の必要な一段階という風にである」[9]と記している。「当時（冷戦終結以前）アクセスできたアーカイブは周知のとおり、このテーマを扱うにはいかなる意味においても不十分だった」。フランスでアーリア化の実態の研究が始まるのは冷戦終結を待たなくてはならなかった。共産主義の終焉により、中欧では国に接

取された財産の返還や補償を求める運動が起き、実際に財産の返還作業が行われた。これに刺激される形でフランスでもユダヤ人の企業や財産のアーリア化への補償問題が提起されるようになった。そうなると犠牲者の救済のためには被害の特定と証明が必要になるため、アーリア化の具体的な実態解明が歴史学に求められた。しかし、そのためにはアーカイブでの個人情報の開示が必要になる。アーリア化がようやくアクチュアルなテーマとして前面化したのは、おそらく弁護士セルジュ・クラルスフェルトらによる一連の訴訟のおかげだろう。歴史家のアネット・ヴィヴィオルカはショアーの全貌解明に向けて、CDJC（現代ユダヤ記録センター：1943-）のすべての史料が1997年のリオネル・ジョスパン首相（当時）の政令で完全公開されたことが大きな弾みとなったことを指摘していた[10]。1997年とはヴィシー政権の官僚だったモーリス・パボンが「人道に反する罪」で告訴され、その裁判がようやく始まった年である。1997年10月にジョスパンが出した情報開示の政令の対象は1940年から45年、すなわちフランスの敗戦から第二次世界大戦終結までの政府の公文書に該当するものである。ジョスパンが政令実施に向けて記し回覧に付したテキストには歴史への真摯さが凝縮されている。

「1940年から1945年の中にわが国で起こった出来事の記憶を永続させることは共和国の義務です。このためには歴史の研究が不可欠です。研究者の研究や出版物は、忘却、歴史の歪曲、記憶の改竄との闘いにおいて効果的な武器となります。したがって、それらは当時の記憶が鮮明かつ忠実に保たれることに貢献するのです。このような研究を可能になるためには、著者がその時代に関連するアーカイブに簡単にアクセスできなくてはなりません」[11]

ジョスパンは政令の精神を冒頭で記した後、年明け（1998）に施行される条文の中身に入る。

「第二次世界大戦中に作成された行政文書は、原則としてすべての人がアクセスできます。これはアーカイブに関する1979年1月3日の法律第79-18号の第6条に基づき、公文書は三十年の期間の保存期間満了後、自由に公開できるようになるためです」[12]

とはいっても、第7条で例外規定を定め、市民の私生活や国家安全保障や国防に関わるようなものは60年以内の公開は原則不可とされた。それでもジョスパンは研究者には例外を認めるように求めた。また情報公開申請への可否については公文書館と当該情報の所轄官庁に判断を迅速にするようにも求めたのである。

ジョスパンの政令によれば公文書の公開申請につき「科学界は特定の政権の過剰な警戒や遅さに不満を抱いている」とあり、以前から情報公開申請への省庁の回答には平均三か月を要していた。ジョスパンの政令が出るまで戦時の公文書を秘めておきたい「特定の政権」との確執があり、1998年の政令施行後にも葛藤は継続するのである。

強制収容所に移送される前に職と財産を奪われ、人間関

係を破壊され、生きる術を奪われていくプロセスはガス室での殺戮に勝るとも劣らぬ残酷さだが、ドレフュスが書いているように、人間を非人間化させるこの恐怖のプロセスには冷戦終結まではあまり光が当たられてこなかったのだ。

3.2 2008年7月のアーカイブに関する法律

もう一つの際立つ歴史書が、2011年に刊行されたローラン・ジョリーによる『L'antisémitisme de bureau（役場の反ユダヤ主義）』である。ここでの「役場」の1つは1941年3月にヴィシー政権が設立したユダヤ人問題全般を扱う警察部門CGQJ（le Commissariat-Général aux Question Juives）である。もう1つは占領からほどない1940年秋に設立されたパリ警視庁ユダヤ人課である。本書にはこれらの組織にどのような幹部がいて、彼らの人事や出世のシステム、思想や価値観、命令系統はどうだったかにつき具体的に記されている。調査が可能になったのはパリ警視庁の倉庫に保管されていた個人情報を含むカードが公開されたためだ。本書の序文によると、2008年7月に制定されたアーカイブに関する法律によって国家公務員個人の情報が集められた史料にもアクセスできるようになった。ジョスパンの1997年の政令が出た後も未だ、情報を秘めておこうという力学が公文書館に残っていたため、約10年後に情報公開の対象がさらに拡大されたのである。その甲斐あって、ジョリーが手にした警察の史料は段ボール箱75箱、計2250ファイルにも上った。ジョリーによると2008年制定のアーカイブに関する法律では、基本的に誰でも情報請求をすればアクセスできるようになる画期的なものだ。しかし、やはり防衛・外交あるいはプライベートな情報などについて例外を設けてもいる。個人の医療データもそうである。

ジョリーは戦犯裁判で光を当てられたような一部のトップレベルの行政官だけでなく、末端職員に至るまでの全体に目を向けた。それまでの戦犯裁判では十分に見えなかつたヴィシー政権の組織全体を内側から、そして上から下までその人間模様に着目して、彼らの論理がどういう風に構築されていったのかを探ろうとしたのである。これはアイヒマンが抗弁したような、公務員は独裁者が決定したことを肅々と実施するだけの機械の歯車に過ぎない、という考え方とは真逆である。特にこの歴史書で興味深い点は、ユダヤ人排外政策に携わることでキャリアアップを目指した公務員や刑事たちの章（第三章：「ユダヤ人事件」でキャリアをつける）であろう。ジョリーは新たに設けられたユダヤ人取り締まりの職務をマスターすることで一定人数の役人や刑事が公務員として昇進するチャンスをつかみ、昇給を得たと指摘しているのだ。たとえば、アンドレ・トゥラールはパリ警視庁内に新設された「外国人およびユダヤ人問題対策セクション」のリーダーに1942年2月に抜擢された。それまでも旅券管理なども扱うパリ警視庁第四課の課長としてユダヤ人の事案を数多く担当しており、複雑なケースにも経験を積んだ結果、その実績が買われたのである。トゥラ

ールは新たな部署に着任するにあたり、パリ警視総監に手紙を書いて責任の重さに見合う昇給を願い出た。願いは聞き入れられ、1942年7月に年収が6000フランから12000フランへと倍増されることが決定された。折しも1942年の春からユダヤ人の東部への移送が始まっていた。情報提供者などユダヤ人摘発の協力者の管理も含め、大きな負荷が部署にかかる時期に来ていた。彼はパリ近郊のユダヤ人の一斉摘発に使われたユダヤ人ファイルの作成者となった。

4. 冷戦終結とEU拡大 / 歴史家のアイデンティティの変容

4.1 ナチスの東方拡大の背景に着目

～若いナチ・エリートたちの構想～

フランス人であっても隣国ナチスドイツの実態研究で近年注目されるのが歴史家のクリスチャン・イングラオ（1970-）である。イングラオはその著書『信じることと破壊すること～戦争機械SSの知識人たち』や『東方の約束～ナチスの希望とジェノサイド 1939-1943』で、ナチスの最も暴力が激発した東方支配（ポーランドやベラルーシ、ロシアなどを指す）にナチ・エリートたちがなぜ、いかに関与したかを探っている。イングラオの研究に加わる形で「東方構想」「ナチ・エリート」「暴力」に焦点を当てた研究は最新の大きな流れの1つとなっている。たとえば歴史家のヨハン・シャプート（1978-）やニコラ・パタン（1981-）の研究であり、文化史や人類学を交えたアプローチにより、これまでにない角度から歴史に切り込んでいるのだ。

ショアの犠牲者（ここではユダヤ人に限る）はフランスで約8万人、オランダで約10万人だが、ポーランドでは約293万人、旧ソ連では約167万人（ウクライナやベラルーシを含む）、ハンガリーでは約56万人と「東方」では段違いに多い。東方構想とはユダヤ人とスラブ系住民を殺戮し、追放した後に、マスターイスであるアーリア人種をドイツや近隣地域から移住させ、血統的に純粋なアーリア人種の楽園を作るというものであった。

イングラオが最初に刊行したショアの歴史書は「ディルレヴァンガー旅団」（正式名称：第36 SS武装擲弾兵師団）の実像を描いた『黒い狩人たち～ディルレヴァンガー旅団～』（2006）である。この旅団はベラルーシやポーランドなどの「東方」でユダヤ人や現地住民の虐殺を行う異色の部隊だった。ドイツ軍がソ連の赤軍と戦っている東部戦線の背後のドイツ占領地域でパルチザンを掃討する任務を請け負った師団である。資料の入手先として、イングラオはドイツのベルリンとフライブルクに加えて、ルブリン（ポーランド）、ワルシャワ、ミンスク（ベラルーシ）、モスクワ、モギリヨフ（ベラルーシ）、ワシントンD.C.を挙げている。冷戦終結後に旧東独、旧東欧、旧ソ連における戦犯裁判資料などが解放されたことで初めて実現できた研究である。

東方構想の実現にはおびただしい数の殺人と住民の強制移動が前提になっていた。そのためインザツグルッphenやゾンダーコマンドと呼ばれた殺戮を専門にする部隊が多数結成され、占領地に續々と派遣された。中でもディルレヴァンガー旅団は暴力性で知れ渡っていた。それは警察長官ヒムラーの肝いりで組織されたこの旅団が刑務所の囚人や軍の規則違反により懲罰部隊に服役していた者の中から「狩猟能力」に長けた者だけを選抜して作られたことによる。彼らはワルシャワ蜂起の際も蜂起軍の掃討作戦に駆り出された。しかも、ほとんど無差別とも言える市民への殺人、レイプ、放火、略奪も行っており、指揮官から兵士まで飲酒は常態だった。クリストファー・ブラウニングの『普通の人びと～ホロコーストと第101警察予備大隊』が虐殺を命じられた普通の人々の心理の葛藤を描いたのに対し、イングラオは暴力的性向の部隊に関する社会人類学的な探求を行ったのである。

4.2 起点としての第一次世界大戦の読み直し

イングラオは序文で先の研究には先行研究が少なからずあることに言及し、それらを大別すれば二つになると述べた。一つ目のグループは1980年代に盛んだった「戦争の文化」というカテゴリーである。様々な戦争経験の型やそうした経験がどのように語り継がれるかという社会的環境、また、それらの解釈の伝播についてである。二つ目のグループは1980年代から90年代にかけて盛んになった研究で、戦争の核心にある「暴力行為」を丹念に記述し、分析することである。二つ目のカテゴリーの研究方法は、イングラオによれば1990年代になってようやく開花したものだ。戦争史家のジョン・キーガン（1934-2012）やヴィクトー・デイヴィス・ハンソン（1953-）、ステファン・オードワン＝ルゾー（1955-）らが先駆をなした。オードワン＝ルゾーはイングラオの学生時代の恩師に当たる歴史家で、27歳以上の歴史家ジャン＝ジャック・ベッケル（1928-2023）やその娘で歴史家のアネット・ベッケル（1953-）らと第一次世界大戦の歴史を読み直すグループを形成していた。オードワン＝ルゾーの著書には『14-18 壟壕の兵士たち』（1986）や『子供と戦争 1914-1918』（1993）などがある。グループの長老格と思われるジャン＝ジャック・ベッケルはゲルト・クルマイヒとの共著『仏独共同通史 第一次世界大戦』や『第一次世界大戦』などを著している。ベッケルは後者の序論で第一次世界大戦が現代世界のひな型になったことに触れている。

「我々が生きてきた世界の大部分はこの大戦の産物であり、逆にいえば大戦は現世界の母体だったのだ。にもかかわらず、この巨大な戦いは、根本的には不可解なままだった。非常に近い文化を持った人びとが、なぜ分裂し、互いに破壊しあうほど激昂したのか？この信じがたいがなお現存する過去の探求こそが、生まれ変わった本書の根拠である」[13]

オードワン＝ルゾーはアネット・ベッケルとの共著

フランスのショアの歴史学はなぜ今日も発展し続けているのか?
— 冷戦終結後の史学史的研究 —

『第一次世界大戦を再発見する』で戦争における暴力を1つの「文化」として位置づけて分析した。ナショナリズムがどう兵士の動員に利用されたかということや、終わることのない喪の感覚を記述することなどに力を注いだのだ。史学史的に興味深いことはこの研究者のグループにおいては、<責任が誰にあるか?>を度外視する姿勢である。<責任が誰にあるか?>にこだわってしまえば国境で立場が分断される。加害者と被害者という二分法に立ってしまえば、眞実の追求はむしろ困難になると考へたのだろう。ジャン=ジャック・ベッケールとドイツ人のゲルト・クルマイヒの共著『仏独共同通史 第一次世界大戦』もナショナリズムを越えたところから歴史を見つめようとした試みである。彼らは戦争の起源や実態を「国家」の枠組みに縛られずに検証しようとした。近代兵器としての戦車や毒ガスが登場したのは第一次世界大戦である。塹壕での持久戦、プロパガンダによる大衆動員、砲弾の破壊力の強化による負傷者の肉体の傷痕、住民の疎開など前世紀までの戦争とは様相を変えた戦争だった。彼らは第一次世界大戦において生じたこの根本的な戦争の変化こそ20世紀文明の基底を作ったと考え、第二次世界大戦も第一次世界大戦の続編だと考へた。こうした認識から、ベッケールは欧州連合の船出に向けて歴史学に新しい時代を開こうとした。

「ドイツの歴史家であろうとフランスの歴史家であろうと、戦争に関するアプローチは『当たり前のように国民的（一国史的）』なものであったことは言を俟たない。他者の歴史を理解しようとする用意はほとんどなかったのである。その克服のためには一種の実習のようなものが必要であった。この実習はその多くをペロンヌの大戦歴史博物館の設立に負っている。そこでは第一次大戦の歴史が国際的なチームによって『書かれ』、ともに研究し、問題をともに理解するということが習慣となった。このような戦争の歴史はもはや国民単位のものであってはならないし、またそのような一国史的枠組みは重大な誤認をもたらすことになるだろう、と考えられるようになったのである」[14]

第一次世界大戦の激戦地となった北フランス・ソンム県のペロンヌに大戦歴史博物館・研究センターが1992年に開館され、ジャン=ジャック・ベッケールが名誉所長をつとめた。グループはこの名を取ってペロンヌ歴史博物館派と呼ばれている。欧州連合の統合が深まった時期にナショナリズムを排し、「欧州人」というカテゴリーの歴史家に彼らはなりつつあった。

ナチ・エリートの多くは第一次世界大戦のドイツの敗北の原因を「背後からドスを突き立てられた」として内側の裏切り者に求めた。それは人種に紐づけられた敵としてのユダヤ人であり、そのユダヤ人が発明したと彼らが主張する国際共産主義である。イングラオは『信じることと破壊すること』の研究の際、ナチズムの思想に染まることは第一次世界大戦で壊された世界への信念が再生されるための過程だったとの仮説を立てた。彼は指導教官オードワン＝

ルゾーのアドバイスに従い、戦争と親衛隊のエリートたちの持っていた信念についての関係を調査することを決めたのである。イングラオは親衛隊情報部（SD）のマルティン・ザントベルガー、ラインハルト・ヘーン、ヴェルナー・ペスト、オットー・オーレンドルフ、フランツ・ジックスといったエリート幹部に光を当て、彼らの青春期や自己形成、敗戦後の顛末などについて群像的に記した。ここから何がわかるかと言えば、それぞれが少年時代の戦争にまつわる苦境や悲痛、恨みからナチスに傾倒していくことである。第一次世界大戦とその後の賠償金支払いやハイパーインフレーションといった次々とドイツを襲った苦難により、若者たちは「敵に囲まれている世界」という信念を持つに至った。ナチズムはレイシズムを鍵に世界を読み解く。ナチズムに影響された若者たちは、北欧（Nordic）に起源をもつゲルマン民族が世界を再生させる、という幻想を心に抱くようになり、間違った信念で敗れ果てるのである。

4.3 繼続する歴史と歴史学

歴史家ヨハン・シャプートの『服従する自由』（2020）は、イングラオの研究領域をさらに第二次大戦後の世界の行方にまで広げた書である。中心はイングラオの『信じることと破壊すること』でも登場した親衛隊の大物経済官僚のラインハルト・ヘーン（Reinhard Höhn）だ。本書によると、ヘーンがナチスでトップ官僚に上り詰められたのは、ナチスが東方で占領した広大な領域を少ないドイツ人で何とか統制するための効率的なモデルを考案したからである。本部で目標を設定したらあとの細かいことは現地に大きく裁量を委ねる方式である。ナチスと言えば細かい規則だらけの命令体系に思う人もいるかもしれないが、実は極めて多様なマネジメントが現地では行われていた。ナチスドイツを急速に海外に拠点を拡大する現代のグローバル企業にたとえるなら、本部から津々浦々の現地工場あるいはローカル地域の拠点に派遣できるマネージャーの数が限られていたため、本部ではノルマだけ決めてオペレーションの大半を現地裁量に委ねたということだ。

ヘーンは敗戦後、戦犯裁判にかけられることもなく、ナチスのネットワークを頼りに地下に潜伏した。彼が再度ドイツの表社会に姿を見せたのはドイツが東西に分裂した1949年である。アデナウアー首相は同年12月31日の法律で、80万人もの旧ナチス関係者に恩赦を与えて復権させた。その後、表社会に復帰したヘーンは1953年に新しい経営を研究するシンクタンク（DVG）のディレクターに抜擢された。さらに1957年にはこのDVGが設立したドイツ版ハーバード・ビジネススクールに匹敵するエリートの経営者養成校Akademie für Führungskräfte der Wirtschaft in Bad Harzburgの校長になった。このビジネススクールはニーダーザクセン州の温泉街バートハルツブルクにあり、ドイツ企業の幹部を育成する学校である。開校からヘーンが死亡する2000年まで、ヘーンが育てた経営者は60

万人に上る。彼らの赴任先には、Aldi, BMW, Krupp, Opelなど錚々たるドイツの名門ブランドが並ぶ。ヘーンがナチ時代から確立した「権限の委譲」というコンセプトは、「パートハルツブルクのコンセプト」とされ、戦後に世界中で導入された。その効率的経営でドイツ企業は「奇跡」の発展を遂げ、ヘーンにとってはナチ時代からの仇敵だったソ連を経済の面でついに打倒したのである。そして冷戦終結後、ドイツ経済界はナチ時代に実現できなかった東欧へ、武力ではなく経済で進出していくのである。

シャープトは『服従する自由』で、現代に継承された経営効率化を提唱し推進したラインハルト・ヘーンの思想形成や歴史観を読み解いていく。戦前の日本と同様、ナチスには社会ダーウィニズムに染まった指導者が多かった。政治学者の山口定によると、人間は人種レベルでも個人レベルでも生来基本的に不平等なもので、支配者たるべき存在と劣等で奴隸たる他ない存在との間に厳然たる違いがあり、生存競争を通じて秀れた個人や人種は一層発展し、劣った個人や人種は没落するというのが『自然の法則』で『神の掟』であると彼らは考えていた。^[15] ここから、社会主義や共産主義における国家による様々な統制や平等や福祉を敵視する視点が育まれる。そしてそれらを束ねているのがソ連の革命を率いた（とナチスではされていた）ユダヤ人であるとされた。

「国内秩序において国家はゲルマン民族を妨げ、奴隸にするものである。国家は静的であり、生命の躍動を否定する。一般的、さらには普遍的であっても、国家は特定の人（人種的アイデンティティ）に奉仕するものではなかった。国家は、人工的であり、自然を否定する。国家は生者を捕らえる死者である。

これらすべての欠点がなかったとしても、国家はいかなる場合でも無用だろう。ゲルマン民族は、自然の法則（創造し、戦い、統治する）を尊重しながら自らを統治するすべを本能的に知っているのだ。つまり、唯一の価値のあるこの法は、市民の平和を保証し、ルールがきちんと守られているか見張っている（国家という）超越的機関の下に置かれる必要はさらさらないということである。善良な人種の人間はみな健全な精神を持ち、自然の規範を尊重し、平和が支配し、子供たちが生まれ、体は養われる所以である。公的秩序はゲルマン人の身体、心、魂の間の予定調和から生まれるため、『法典』（民法と刑法）など不必要なのだ。人種的に健全なすべての人間はナチスにしかなりようがなく、結局のところ、人生それ自体の司令官である『総統』の命令に従うことしかできない」^[16]

冷戦終結前後に定着した新自由主義は国境や規制をできるだけ排除し、限りない競争を是とする点で社会ダーウィニズムに通じるものであろう。そこでは弱者が滅びることが社会の進化を促すので善なのだ。ドイツ企業は冷戦終結後に東ドイツとポーランドなどの東欧諸国へ市場と労働力の確保に武力なき進出を行った。もちろん、これを

1939年のナチスの侵攻と同一視はできない。むしろEU側としては市場民主主義の拡大と考えていただろう。しかし、中欧出身の人類学者アイヴァン・カルマーが指摘するように、中欧には西欧がレイシズムを有し、中欧を植民地化しているという見方があり、ハンガリーの権威主義政権を率いるオルバーン首相の登場のように現地の民族主義を駆り立てるることは注意を要する^[17]。ただし、新自由主義と社会ダーウィニズムとファシズムの関係やドイツの戦時中と現在の関係については今後精査される必要がある。

5.まとめ

フランスのショアーの歴史学が冷戦終結後に新たな勢いを得ていることを三つの観点から見てきた。共通して言えることは、これらの歴史研究が扱うテーマが冷戦終結後に時々刻々とアクチュアルな問題として浮上してきたことであろう。世界大戦を二度経験し、今もウクライナ戦争が直撃する欧州人にとって、戦後は戦間期だったのではないかとの疑いがあるのかもしれない。前回の大戦の帰結が何だったかは、ますます生々しいテーマとなるだろう。

謝辞

修士論文の指導および査読と口頭試問をしていただきました河原温教授（主査）と野崎歓教授（副査）に感謝します。

注

- [1] イヴァン・ジャブロンカ、『私にはいなかった祖父母の歴史』（名古屋大学出版会、2017）、p.84
- [2] 日仏会館における講演（2019年6月24日）
Ivan Jablonka : « La création en sciences sociales »
<https://www.youtube.com/watch?v=ZFwscHUY0Kc>
2025年11月18日アクセス
- [3] 牛島信明、『反=ドン・キホーテ論～セルバンテスの方法を求めて～』、弘文堂、1989、p.120
- [4] Cervantes, Don Quixote, Penguin, 2003, p.25
- [5] 『私にはいなかった祖父母の歴史』、p.274
- [6] 同上、p.317
- [7] Alan Corbin, *Le monde retourné de Louis-François Pinago sur les traces d'un inconnu 1798-1876*, Flammarion, Paris, 1998, p.8
- [8] *Le monde retourné de Louis-François Pinago sur les traces d'un inconnu 1798-1876*, p.247
- [9] Jean-Marc Dreyfus, *Pillage sur ordonnances ~ Aryanisation et restitution des banques en France 1940-1953*, Fayard, Paris, 2003, p.8
- [10] Annette Wieviorka, <Comprendre, témoigner, écrire>,

フランスのショアの歴史学はなぜ今日も発展し続いているのか?
— 冷戦終結後の歴史学的研究 —

- Nouvelles perspectives sur la Shoah* (共著), 2013
- [11] CNRS, Circulaire du 2 octobre 1997 relative à l'accès aux archives publiques de la période 1940-1945 2024
年12月11日 アクセス <<https://dgdr.cnrs.fr/bo/1998/01-98/433-bo0198-cirdu02-10-97.htm>>
- [12] 同
- [13] ジャン=ジャック・ベッケール, 『第一次世界大戦』, (白水社, 2015), p.8
- [14] ジャン=ジャック・ベッケール&ゲルト・クルマイヒ, 『仏独共同通史 第一次世界大戦 (上)』, (岩波書店, 2012), はじめにp. xii
- [15] 山口定, 『ファシズム』, (岩波書店, 2006), pp.188-189
- [16] Johann Chapoutot, *Libres d'obéir: Le management, du nazisme à aujourd'hui*, Gallimard, France, 2020
pp.49- 50
- [17] Ivan Kalmar: The Relationship Between Europe's East and West. How Racist and How Colonial?
<https://www.youtube.com/watch?v=ZOOMYEFFx6o&t=1s>
2025年11月20日アクセス

参考文献

○外国語文献

- S. Audoin-Rouzeau & Annette Becker, *14-18 retrouver la Guerre*, Gallimard, Paris, 2000
- J. Chapoutot, *Libres d'obéir: Le management, du nazisme à aujourd'hui*, France, 2020
- J. Chapoutot, *La révolution culturelle nazie*, Galimard, Paris, 2017
- A. Corbin, *Le monde retrouvé de Louis-François Pinagot sur les traces d'un inconnu 1798-1876*, Flammarion, Paris, 1998
- J. Dreyfus, *Pillage sur ordonnances ~Aryanisation et restitution des banques en France 1940-1953*, Fayard, Paris, 2003
- C. Ingrao, *Believe & Destroy~Intellectuals in the SS war machine ~*, Polity, Cambridge, 2015
- C. Ingrao, *Les chasseurs noirs~La brigade Dirlewanger*, Perrin, Paris, 2009
- C. Ingrao, *The promise of the east ~Nazi hope and genocide 1939-43*, Polity, Cambridge, 2019
- J. Laurent, *L'antisémitisme de bureau*, Grasset, Paris, 2011
- N. Patin, *La Catastrophe Allemande 1914-1945*, Fayard, Paris, 2014
- N. Patin, *Krüger: Un bourreau ordinaire*, Fayard, Paris, 2017

○日本語文献

- アドルノ & ホルクハイマー, 『啓蒙の弁証法～哲学的断想～』, 岩波書店, 2007

- アンリ・ルソー, 『過去と向き合う～現代の記憶についての試論～』, 吉田書店, 2016
- イヴァン・ジャブロンカ, 『私にはいなかった祖父母の歴史』, 名古屋大学出版会, 2017
- 牛島信明, 『反=ドン・キホーテ論: セルバンテスの方法を求めて』, 弘文堂, 1989
- 小倉孝誠, 『歴史をどう語るか～近現代フランス, 文学と歴史学の対話～』, 法政大学出版局, 2021
- 川上勉, 『ヴィシー政府と「国民革命」』, 藤原書店, 2001
- クリストファー・ブラウニング, 『普通の人びと～ホロコーストと第101警察予備大隊』, 筑摩書房, 2019
- ジャン=ジャック・ベッケール&ゲルト・クルマイヒ, 『仏独共同通史 第一次世界大戦』(上下), 岩波書店, 2012
- ジャン=ジャック・ベッケール, 『第一次世界大戦』, 白水社, 2015
- フランス・ノイマン, 『ビヒモス～ナチズムの構造と実際～1933-1944～』, みすず書房, 1963
- ラウル・ヒルバーグ, 『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(上下), 柏書房, 2016
- ロバート・O・バクストン, 『ヴィシー時代のフランス～対独協力と国民革命 1940-1944』, 柏書房, 2004
- 山口定, 『ファシズム』, 岩波書店, 2006
- 渡辺和行, 『ホロコーストのフランス 歴史と記憶』, 人文書院, 1998
- 渡辺和行, 『近代フランスの歴史学と歴史家』, ミネルヴァ書房, 2009